

昭和二十七年二月一日 第三種郵便物認可
昭和二十四年六月三日 國有鉄道特別承認雜誌第一一九九号

經濟論叢

第101卷 第5号

哀 辞

故佐波宣平教授遺影および原稿

- ミュール型紡績工場 堀 江 英 一 1
- 部門間の連関構造 山 田 浩 之 雄 23
井 原 健 雄
- 原価管理思考としての変動予算概念 野 村 秀 和 43
- 低開発国開発計画における技術選択 名 畑 恒 64

記 事

佐波教授逝く

追悼講演 (山田浩之 前田義信 谷山新良 森嶋通夫 上田三四二)

追憶談 (葛城照三 安間進)

故佐波宣平教授自作年譜

昭和43年5月

京 都 大 學 經 濟 學 會

随筆のことなど

上田三四二

故佐波宣平先生の学問はもちろん、先生その人を語るのにも、私は、自分がそれにふさわしい者であるとは毛頭思っておりません。

私は一介の医者であり、傍ら、短歌を弄ぶという餘技を持っておりますが、先生の御専攻であられた経済学については、何の知識も、また何の興味をも持合せていない人間です。強いていえば、本学に学んだ後輩、という以外に何の関係もなかった私が、どのような所縁によって先生に近づきを得たか、そうして、その交友を通してどのような恩恵を蒙ってきたか——故先生を語ろうとすれば、そういう全くの私ごとを語らざるを得ない自分を見出して、私自身当惑を覚えるというのが偽りのない心境です。以下このような壇上に立つことの場違いと、その僭越さを重々心得えたものの私的な追憶譚として、どうか、しばらく時間をいただきたいと思えます。

御承知のように、故先生には3冊の随筆集があります。いずれも、先生の御研究にふかく係わり、その学問のあわいからこぼれ出た珠玉の随筆集であります。私の愛蔵する第1冊目の集「海運研究者の悲哀」の扉に、「昭和27年3月21日 京大病院内科南病舎にて 佐波宣平」の文字が見えます。当時、先生は、最初の大患である心筋梗塞のため京大病院に入院中であり、私はその南病舎の区局員でした。もっとも私は先生の主治医というわけではなく、治療の間接的なお手伝をしたに過ぎませんでした。その私を先生に近づけた出来事として、こんなことがありました。

当時の主任教授は前川孫二郎先生でした。ある日の廻診で、診察のあと佐波先生は前川教授としばらく雑談をされましたが、そのとき不意に先生は、「この病室には詩がない」という意味のことを仰言いました。

「詩？」前川教授はちょっと意味がわからなかったようでした。

「そうです。詩です。もちろん、不幸なデスではなく幸福なポエトリーですが」

廻診についていた教室員たちは皆笑いました。私も笑いました。緊張した廻診のなかでのこういう一瞬の息抜きほど楽しいものはありません。しかし私は、そのときの先生のことばをただのウィットとして聞き過すことが出来ませんでした。先生はそのときたしか3階北側の個室に入っておられ、北側の病室は暗く陰気なだけではなく、中病舎を向うに臨んで、その眺めはどう考えても殺風景極まるものだったからです。

そんなことがあって、私は、時々先生の病室をたずねるようになりました。医者としてと言うよりは、1人の人間として。そうして私たちは多く病氣以外のことを話し合い

ました。何を話したか、今ではもう記憶にのこっていないのが残念ですが、そのときの記念として私の手に随筆集「海運研究者の悲哀」が遺されているわけです。この1冊を手にとるたびに、先生もまだ40代の、そして私もまだ30前であった昔のことが、なつかしく思いのうちに返ってくるのを憶えます。

詩、ポエトリー——この言葉によって先生に近づいた私は、其後10数年に亘って変ることのなかった交りのうちに、つねに先生の中に詩人を見て来たように思います。

もっとも、先生は、ご自分を詩人だと仰言ったことは一度もありません。それどころか、自分にはそういう才能はないのだ、というふうに謙遜されるのが常でしたが、先生の一種非妥協的な、狷介なまでの学問一筋の道は、あれは、およそ詩魂というものなくて叶う道だったのでしょうか。先生の中の詩人は、その詩魂を海運、保険、および数理経済学という学の道に投入することによって、学者として、稀れにみる厳しい孤独な道を貫かれたのだと私は理解しています。

しかし、はじめにも申しましたように、私にとって先生の学問は、登る道のない高峯に同じものです。ですから以上のことは、私の僭越極まる想像にすぎないのですが、その高峯の裾野に拡がる随筆の分野についてならば、私にも多少の散策がそこに許されていると申してもよろしいかと思えます。そうして私は、その随筆の中に、いくつか、先生の詩人を発見することが出来るように思うのです。

一例として、「海運研究者の悲哀」の中にある「戦前派」という一文をあげてみます。これは、垂水にある神戸商科大学の教授を兼任されたとき——昭和25年の春の話ですが、先生はその大学のある丘にのぼって、直ちにあの有名な志貴皇子の歌、「石ばしる垂水のうへの早蕨の萌えいづる春になりけるかも」を思い出された。この歌の「垂水」を、固有名詞と限定するのは必ずしも当を得ていないのですが、「私という人間は、それを知りつつ『垂水』を志貴皇子のこの歌から切りはなして考えることの出来ない人間である」と先生は言います。

さて、その開講の第1日、先生は教壇に立つなり、この垂水に縁のある万葉の歌を知っているかどうかを学生に尋ねられました。が、1人も知っている学生がいない。その落胆を先生はこう述懐しておられます。少し長いが引用してみます。

「しかるに、何ぞやおどろき入った次第である。誰1人として知らない。1人だに知っている者がない。多数の学生のうちには、1人ぐらい万葉に肩を入れる風がわりの人間がいるものだが、それが1人もいない。私はガッカリしてしまった。しかも、私チェックをとって黒板に前記の『石ばしる』の歌を目のまえに書いてみても、学生の間には、格別に、感興の色さえ出でこない様子であった。」つづいて先生はこうつづけます。

「もちろん、海運の研究に万葉が是非とも必要だとは言わない。海運論は国文学では

ない。しかし、すくなくとも文学は教養として学生の当然に身につけているべきものである。文学は、衣服や帽子より以上に、文化人の身につけるべきものである。文学をもたない人間は素裸のガサガサの人間である。文学を愛しない人間はヒューマニズムのない人間である。」

ここに、先生の詩人としての面目が遺憾なくあらわれていると私は考えます。あるいは、詩人の意味を拡げていったところに出会う文学者、教養人、^{まこと}真の人間としての先生の面目があらわれていると考えます。随筆の中には、論説、聖書、徒然草をはじめ、ドストエフスキー、モウパッサン、バルザック、キエルケゴール、其他多数の人とその作品が見事に血肉化された形で出て参りますが、先生の講義にも、時あってこの随筆に見られるような、文学者佐波先生の顔ののぞくことがあったのではないかと想像いたします。

同じ随筆集の中で先生は、またこうも言っておられます。「私は小説ずきである。どんなに本職の仕事がいそがしいときでも、何か文学的作品の伴奏がないと、調子が出てこない」と。

この言葉は、先生の最後になった座談会において、一層の切実さをもって、次のように言われています。「私は、どの著作を書くのにしましても、長篇小説を書くような気持ちなんですな」。私は、ここに言われている著作とは「交通概論」をはじめとする先生の主著をさすものと理解し、この発言に非常に意味ぶかいものを感じとるのです。

私は先に、先生が自分を詩人だと御言ったことは一度もないと申しました。が、この座談会——おそらく先生のこの種の発言としては最後のものと思われまますこの座談会の中で、実は、先生は自らを詩人と呼んでおられるのです。それは、先生の好きであった数学について感想をのべられたときの言葉で、次のように言っておられます。

「数学というものは、なんとしてもあらゆる学問のうちでいちばん美しい。エレガントですね。私は、うねばれですが、自分で自分を詩人だと思っているんで、美しいものに非常に魅惑されるんです。」

私はこの座談会の記事を、ことし3月1日の夜、すでにもの言わぬ人となってしまわれた先生のかたわらで、山田助教からお借りしたゲラ刷りで読みました。そうして、私は白布に面をつつまれた先生に向かって言いました。「そうです。先生は詩人でした。その美しいもの、その純粋なもの、その一途なものを、学問における真理として追究し、学者としての悔いのない一生を終えられました。先生の半面は科学者、他の半面は詩人であり、私はその詩人としての先生を、つねに驚嘆のこころをもって見守ってきたのでした。」白布をとって、先生のお顔を拝んだときにもこらえていた涙が、このとき不意に私に流れました。

お近づきを得て以来10数年、私は先生がほとんどつねに御病人であられたことを、ある痛い思いをもって見て参りました。そもそも、私たちの出会いが、先生の心筋梗塞であったことを思えば、この危険な病気に対しても私は感謝すべきであったかも知れません。いや感謝は、この危険な病気によって傷ついた先生の心臓が、よくその後10数年に亘って機能を果し、のち度重なる大きな手術にさえ耐えて来たことでありましょう。先生にはほかに早くから気管支喘息があり、その発作は、58歳以後かき消すように起らなくなったと述懐されていますが、喘息にかわって先生は網膜剥離と胃潰瘍を患われ、ついで不治の病いを得られました。この病いに対する先生の決して挫けることのなかった闘病の精神と、病の中にあってもなお学問に専念された強固な意志については、今更、改めて感嘆の声を発するまでもありません。

しかし、私は、自らを不治と知って挫けることのなかった先生の中に、さすがに、人生遺恨の情をつくされるもう1人の先生の居られたことを知っています。そうして、そういう先生の中に、私はまた、純粹にして多感な詩人佐波先生を発見するのです。

先生は俳句をたしなまれました。学問のさまたげになるのを恐れて実際の句作は乏しかったようで、長年自作の句を示されることもありませんでしたが、胃切除の手術をなさってから以後は、その病者の感慨をこの短かい詩の上に託されることも少なくなかったように私などは想像しています。

私はその俳句のなかに——俳人佐波冬木先生の中に、人生遺恨の情をつくされる先生を発見するのです。昭和41年の冬、先生は私に、次の句を示されました。

ゆく秋のなごりの惜しき世なりけり

やがて果つ身をもてしぐれ聴きにけり

それから、昨年(昭和50年)の10月、先生はまた次の句を示されました。

扇手にするもこの夏かぎりかや

網のみじかきいのち直に欲り

扇手にするもこの夏かぎりかや。誠に哀切無恨、真情無比の句であり、句はそのまま先生の其後を予言していることに言い知れぬ悲しみを覚えたいではられません。先生は、私に、その生涯の最後において、かくも切実な俳句をもって、詩人の真骨頂をお示しになったのです。

この俳句の、哀しみのなかにこもる沁みとおるような感情の深さ、あるいはその優しさは、反対に私に次の「ツァラトストラ」の中にある意志的な言葉を思い出させます。

「飢えながら、荒々しく、寂寥に、神を知らず。Hungernd, gewalttätig, einsam, gottlos.」

この言葉は、第2随筆集「保険危言」の扉に先生が私のために書いて下さったもので

す。それは、13年前の昭和30年7月15日、先生の心臓発作満4周年の日附をもっておりますが、「飢えながら、荒々しく、寂寥に、神を知らず」の語は、わき目もふらぬ、きびしい、学問の人としての先生を髣髴させます。あらゆる世俗的なものに抗し、榮達を求めず、名利を追わず、先生の眼はつねに真理の方に向けられていました。「寂寥に、神を知らず」——この語ほどの確に学道の人佐波先生を語る言葉も少いと思いますが、その寂寥に耐え、神に救いを求めようとしない意志の人佐波宣平先生の中に、また、いま私が俳句を通してみたような情の人佐波宣平先生を発見することは、私にとって意外でも何でもありません。

先生は学者としてだけでなく人間として、63年の生涯を生き抜かれました。14年前、随筆集「保険危言」のなかで、心臓を病んだからは、長命おぼつかなしとして、その第1次生存計画を、恩給のつく昭和30年3月まで、第2次計画を銀婚式の昭和35年3月まで、そして第3次計画を、昭和40年1月の還暦までとし、「できれば、還暦まで生きのびたい。これが私としては最大限の願望である」と書かれた先生は、立派にその目的を果して世を去られました。御家族は勿論、先生の縁につながる私たちの淋しさは誠に深いものがありますが、すでに、思い出のなかに、先生の存在のいよいよ重いものになってゆくことに、私はせめてもの慰めを見出そうとしています。先生は闘病の限りを尽くし、覚悟の最終講義をも終えて、亡くなられました。しかし、私の心の中に、私の思い出の中に、かくも鮮かに先生生前の面影が生き、そのお言葉が生きているかぎり、私にとって先生はいまも決して遠い人ではありません。悲しみの涙をぬぐって、私は私の記憶の中で、そういう先生をしっかりと捉え、これからも先生に導かれて生きてゆくことでしょう。合掌。